

薬毒の害

前項に説いた如く、人間の罪が魂の穢れとなり、それが心を介して靈の曇りとなり、その浄化が病氣であるとしたら、其曇りを解消する以外、病を治す方法のあり得ない事は余りにも明かである。処が西洋に於いてはい。ポクラテス、東洋に於いては彼の神農氏が、病人に薬劑又は薬草を服ますと、一時的苦痛が緩和されるので、之を可として医術の始祖となつたのであるから、此時から既に誤謬は発生した訳である。成程薬を用いれば、一時的苦痛が減るので、之こそ病を治すべき方法と、單純に考へたもので、其時代の人智の程度としては、無理もなかつたのである。それが現在迄続けて来たのであるから、今迄の人間の迷蒙さは不思議とししか思へないのである。

処が、私が生れた事によつて、此人類の不幸の源泉たる病氣が解決される事となつたので、全く有難い時が来た訳である。従つて之によつて文明は百八十度の転換となり、理想世界実現となるのは勿論であらう。

右の如く、人類は古い時代から薬剤を体内に入れつつ、今日に到つたのであるから、現代人悉くは薬剤中毒に罹っている。曩にも述べた如く、薬剤なるものは有毒物である以上、体内に残存して病原となるに拘はらず、医学は薬毒は自然消滅するように思っているが、之が大変な誤りで、実は薬毒は生命の在らん限り消滅しないのが原則である。之に就いて私の体験をかいてみよう。私は今から三十六年以前、入歯をする為歯を抜き、其穴へ消毒薬を詰めた処、歯痛を起し始めたので、それを治すべく又薬を用いた処、漸次痛みは増すばかりなので、次か

ら次へ有名な歯科医に罹ったが、どうしても治らず、遂に二進も三進もゆかなくなつて了つた。何しろそれ迄に四本の歯を抜いた位であるから、如何に酷かったかが判るであらう。それでも治らず、而も薬毒は頭脳迄も犯して来たので私は結局発狂か自殺かの運命にまで押詰められて了つたのである。然るに天未だ吾を捨てざるか、或動機によつて薬の爲である事が判り、それから歯科医を廃めた処、漸次治つて今日に到つたのであるが、驚いた事には今以て少しではあるが痛みが残っており、毎日のように自分で浄霊をしている。之によつてみても薬毒は数十年掛つても消滅しない事がよく判るであらう。

右によつても分る如く、薬剤は決して消へない事である。ではどういふ訳かというと、本来造物主は人間を造ると共に、人間が生きてゆけるだけの食料や其他一切のものを造られており

其為に土壤や海川に其力を附与され、植物鉬物等は元より、空氣日月星辰悉くがそうである。そうして単に食物といつても一定の条件がある。条件というのは食うべきものと、食うべからざるものとが別けられてある。従つて其必要から人間には味覚を与へ、食物には味を含ませてある。又食物の種類も色々あり、悉く人間の健康や環境に適合するよう造られている。例えば塩分が必要な時には塩辛い物が食いたくなり、甘味が必要な時は甘味が食べなくなり、水分の必要な場合は咽喉が渇くというように、自然は必要によつて意欲が起るように造られている。それと共に消化器能も一定の条件に適うように出来ている。即ち食うべきものは悉く消化されるが、食うべからざるものは、処理されないで残存する。此理によつて薬剤は異物であるから、消化処理されないので、之が古くなると毒素に変化し

て了う。その毒素の排除作用が病氣であるから、病原はとりも直さず薬剤という事になる。喀痰、鼻汁、汗、膿、毒血などは悉く薬毒の変化したものであるから、世に薬剤程恐るべきものはないのである。

之を知らなかった人類は、病氣を治そうとして病氣を作つて来た訳である。何と重大誤謬を犯して来た事に気がつくであろう。実に世に之程な愚な話はあるまい。としたら此一事だけを人類に知らせるとしたら、如何に大なる救いであるかは、今更贅言を要しないであろう。何よりも此私の説を信じて、専門家諸君は病氣と対照してみるがいい。一点の誤りない事を知るであらう。

右によつてみても判る如く、長い間人類は病氣に対する誤つた解釈が因となり、病氣の解決処か、逆に病氣を作り病氣の種

類を増やしつつ今日に到つたのである。然も此誤謬が貧乏と戦争の原因ともなっているのであるから、何よりも此蒙を啓かなければ真の文明は生れる筈はないのである。従つて現在の人間は薬毒のない原始時代の人間に比べれば、その健康の劣弱さは比較にはならない程で、無薬時代の人間の寿齡が、百歳以上が普通であつた事など、種々の記録や文献等にみても余りに明かである。私は彼の武内宿弥の寿齡参百六才という有名な話は、本当とは思つていなかったが、先年武内家の家系を見た

処、之は確實である事が判つた。武内家の祖先の中、最長寿者は三百四十九才で、次は三百二十何歳、次は三百十何歳、武内宿弥は確か四番目であつたと記憶している。此時代は今から二千年以前から千六、七百年前位にかけてであるから、まだ漢薬の渡来以前であつた事は間違いない。又神武天皇から千数百年

迄は、天皇の寿齡は殆んど百歳以上であつた事は記録に明かである。

近来、米国及び日本人の寿齡が、些か延びたといつて喜んでゐるが、此原因は医学の進歩の爲ではなく、他に原因があり、之は後にかく事にするが、要するに一切の病原は薬毒である事が判ればいいのである。病氣の爲の痛み、痒み、発熱、不快感等凡べての苦痛は、悉く薬毒が原因である事は、私の多数の経験によるも絶対誤りはない。勿論遺伝黴毒も、癩病、天然痘、麻疹、百日咳等の先天的保有毒素も悉く薬毒である。何よりも現代人で全然無病の人は、恐らく十人に一人もないであろう。どの人をみても何かしらの病氣を持っている。数人の家族で病人のない家は、珍しいとされており、一人や二人は一年の内に入院する者のない家庭は殆んどあるまいと共に、一年中

一滴の藥を服まない人も稀であらう。此様に現代人は弱体となつてゐるから、病氣を恐れる事甚だしく、此為に要する費用、不安、努力の為に及ぼす影響も、蓋し甚大なものがある。

從而、此世界から藥劑悉くを海へ投げ捨てたとしたら、其時を期とし病氣は漸減し、何十年後には、病なき世界の實現は斷言し得るのである。

次に、之から主なる病氣に就いて解説してみるが、人体の基本的機能としては、何といつても心臓、肺臓、胃の腑の三つであるから、これから先にかいてみよう。

